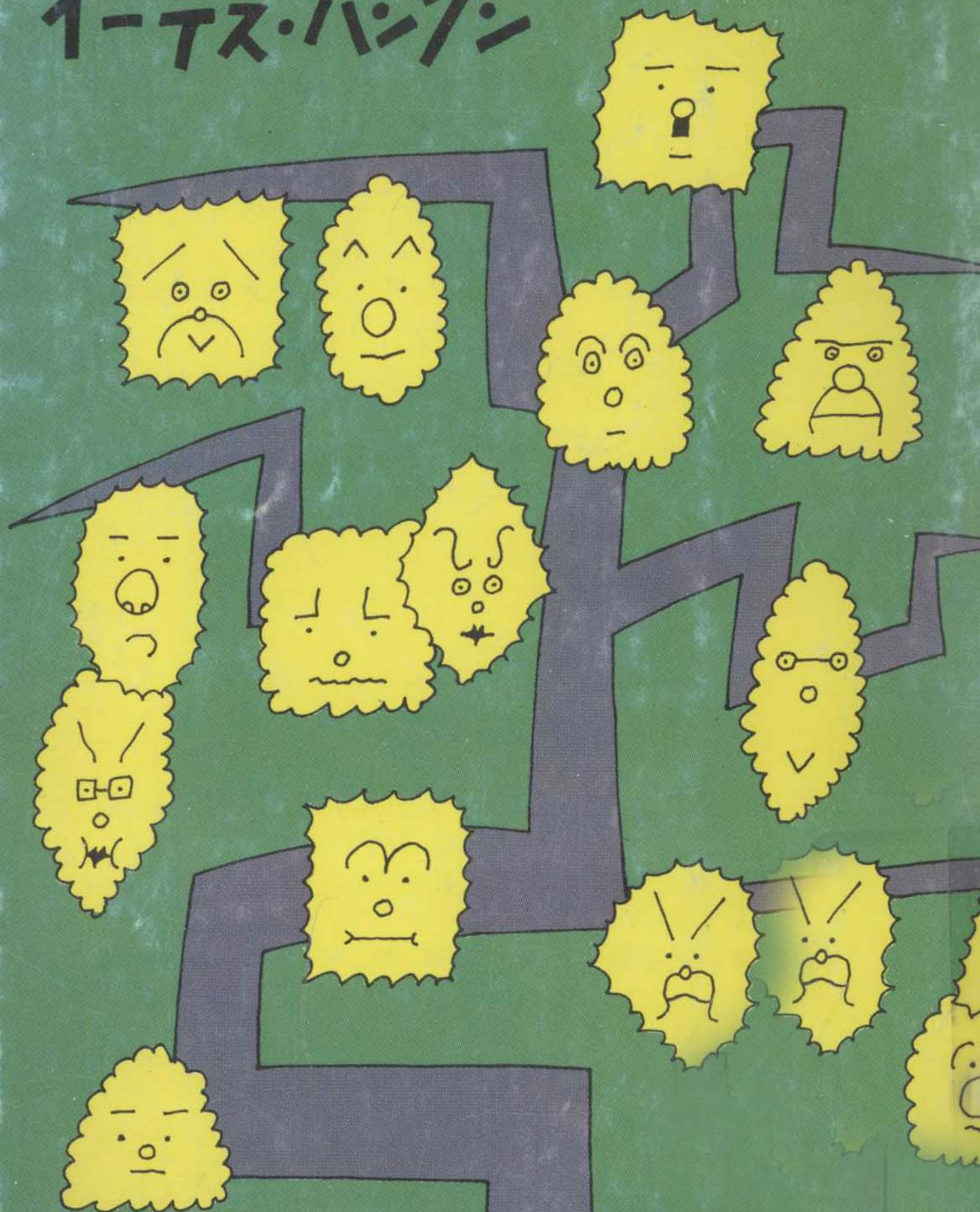
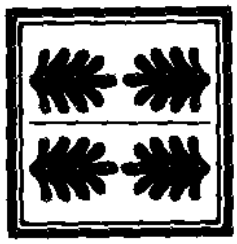
花の木登り協会

イーデス・ハンソン



イーデス・ハンソン〈著者〉1939年インドのマスーリで生まれる。父は宣教師。幼時にアメリカへ渡り、オクラホマ・シティ大学中退。日本には1960年以降在住。他に「阿呆にて候」などの著書がある。



講談社文庫

花の木登り協会
イーデス・ハンソン
昭和54年5月15日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社国宝社

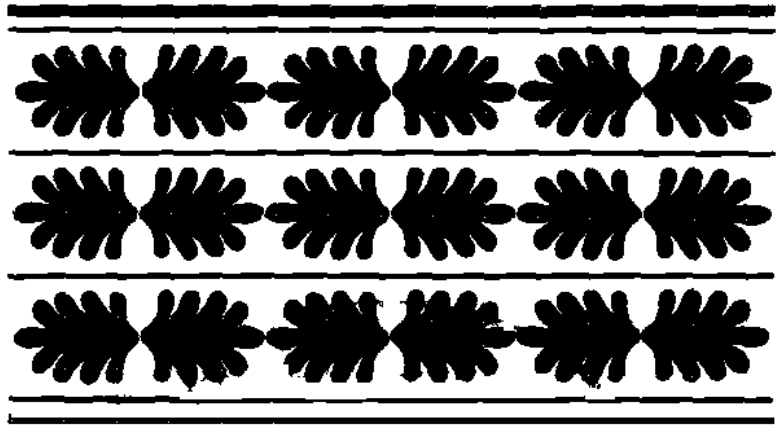
© Edith Hanson 1979

Printed in Japan
0193-315771-2253(0)　320円
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

花の木登り協会

イーデス・ハンソン



講談社

目次

花の木登り協会　七

本書を推す　井上ひさし・小松左京・田辺聖子・筒井康隆・星新一　二四七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

花の木登り協会

プロローグ

昔、むかし、オオムカシ、ある東洋の国に『木登り協会』という有名なグループがあったのを聞いたことがあると思う。もっとも大ざっぱなウワサだけで詳しくは知らないだろうから、本当のことを話そう。

本格的な協会が出来たのは、一九七六年（その国では昭和五十一年とも言っていたが）の一月の第二木曜日であった。それまでは、ただ木登りの好きな仲間が時々寄り集まって、木の多い地方へ出掛け、二泊三日で木に登ったり、酒を飲んだりして楽しんでいただけで、組織というようなものはなかった。

たまたま誰かが、「いっぺん外国の木にも登ってみたいなア」と言い出し、一九七五年の暮れから、女房や子供、ジイさんやバアさん、メカケや恋人を連れてグアム島へ出掛けた。そして、みんなでジャングルの珍しい木を楽しく登りながら、一九七六年のお正月を迎えることになった。帰国後、木登り海外旅行は評判がよくて、

「また行こうぜ！」

という人が多いものの、中には行きたくても、行くたびに旅費をマトモに払ってたんじゃ負担が重すぎるという声も少なくなかった。そこを何とか考えようということで、一九七六年、一月

の第二木曜日に木登りの愛好者達が集まった。そして、いろいろと思案した挙句に、めいめいで旅するより、れっきとした団体で旅行した方が、飛行機代もホテル代も断然安上がりだという、もっとも単純な理屈から『木登り協会』が生まれたのだ。今から思えば、一時政府を動かすほどのチカラを持った木登り協会がそんなところから始まったとは、マコトに信じがたい話だろうが、事実は想像よりも奇なのである。

それはのちに話すとして、協会になった以上、やはり、協会長がいなきゃおかしいという意見にしたがって、自ら会長になりたい人、または「お前がやれ」と親友にすすめられた人、数人がすぐに会長候補に立った。ただし、みんなが仲のいい友達だけに、気悪くしたり、傷付けたりしないよう一人だけに絞る作業が非常に困難だった。発声投票や挙手投票などではハッキリしすぎて困るから、ジャンケンの真剣勝負で、候補者同士が会長の椅子を争うことになった。

スサマジイ決戦に勝ちぬいて会長の地位に就いたのは薬局チェーンの中年社長であった。激しい決戦で多少息ぎれしたせいか、新会長の就任のあいさつはごく短く、

「みなさん、ありがとう。ご存じのことと思いますが、団体旅行は人数が多ければ多いほど安くなるわけだから、お互に助け合う意味で、先ず会員の人数をドンドンふやすよう、みんなで努力シマショー」

単純な内容でありながら、言い振りそのものがダイナミックでクライマックスへの持って行き方もうまく、

「目標！　ヨンヒャクニジュウーナナ人！」

ファイトがわきあがった全員の嵐のような拍手を浴びながら、新会長は初のお勤めを終えた。

会長の言葉のあおりで、その日からどの会員も精いっぱい張り切った結果、お盆までにメンバーの数は四百四十人を突破した。やがて二度目の木登り海外旅行の際には、人数は満席のジャンボ・ジェットの二機分にも達したのであった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

木登り協会が急速にそこまで発展した以上、会長と、副会長（ジャンケンの決勝戦に敗れた人）と、学生アルバイトの秘書の三人だけでは協会の面倒などとても見切れたものではない。中年になってせっかくラクをしようと思っていた会長は、絶えず秘書の男の子にグチをこぼしていた。

「趣味だというのに、人手がなくて、会社にいるより忙しいじゃないか、オレ！」

「そらア、会長、趣味やと思わはるさかいイヤになりまっせ。やっぱり、ここまで来おったら、商売と同様、会費とって、ちゃんとした事務所に、ちゃんとした運営機構を作らんとあきまへんわ」

「お前ったら、三年半も東京の大学にいるくせに相変らず発想が大阪人らしいな」

「浪花っ子やもん、しょうがおまへん。けどな、考えたらそうだっしゃろう？　会社みたいな形にせなんだら、いつまでたったかてラクでけしまへんでエ」

「それもそうだろうな。オレが薬局チェーンの社長になったときは、仕事がなくてラクでなア……だから、こっちも会社みたいに完全に組織化したら、当然会長もラクになるというんだね。なるほど」

「そうでんがな、商売、商売！」

「そうムキ出しに言うなよ！　お前のそういう根性がなんとなくイヤらしい」

「そうかて……」
「組織化といいなさい」
「ヘエヘエ、どちゃでも」
「副会長に電話して、組織化について話があるから出て来るように言っといてくれ」
「副会長はな、ゼロメーター地帯のメンバーたちを連れて、秋田へ木登りに行きゃはりましてン」
「なにッ！　会長のオレが働いてるのに、なぜそんな勝手な真似をすんだよ」
「アレ？　副会長は自分が旅行係でもあるんやし、勤めやいうて出掛けはりましたけど」
「そんなこと言ったって、一々ついて行くことはあるまい。調子のいい！　ヨシ、お前とオレでやっちゃう。さア、商売、商売……いえ、あの、その、組織化、組織化！」
「言いにくおますやろう？」
「えいッ、商売だ！」
「素直でよろし」

会長と秘書のやり手坊主の努力の結果、木登り協会は名前だけの協会から、立派な事務所とたくさんの事務員を持った、ガッチリした組織になった。二人の努力といっても、会長がひたすらに考えていたのは、ただラクをすることのみなので、人がなにかと相談に来るたび、
「やり手坊主に聞け」
というものだから、最終的には、灰皿の数から、事務員の給料、営業方針まで、なにもかもが

浪花っ子のアルバイト秘書の感覚と判断に任された形となった。

大学卒業を半年後に控えていた浪花っ子は、卒業論文を事務員の一人に書いてもらいながら、自ら木登り協会の組織化を見事に済ませて、約束通りに会長をラクにさせてあげた。

やがて大学を無事卒業した後、彼は自分の出身地にも木登り協会を結成するため、会長の承諾を得て、東京から引揚げた。四年ぶりに大阪へ戻ると、早速事務所を開き、まず自分を大阪支部長に任命した。それはウヌボレでもなんでもなく、実際のところ、メンバーはまだ彼一人しかいなかったのだ。それでも、運動を始めて一週間もたたないうちに、キッチリ会費を納める会員がなんと三十一人も出来た。さらに多くの人を惹付けるプランを作るために、彼はメンバーを集めて木登り協会に対する要望と期待を聞き出すことにした。

「みな、何が一番欲しねん？」

「木イや」

「そら、解っとる。もっと詳しい言うてくれ」

「そうやなア、木は木やけど、例えば、きれいな木が仰山（ぎょうさん）あるとこで、いつでもそこへ行ったら好きなように登れるちゅうとこ……」

「そやそや、家族でも連れて、ええ環境を楽しみもって、安心して登れるところがあったら最高や」

「なるほど。しかし、土地が高うてなア」

「買わんと、借（か）るわけにいかんやろか？」

「木をか？　レンタカーやったら聞いたことあるけど、レンタ・ツリーは知らんなア」

「ちがいまんねん！　木が仰山ついた土地を借るねん、アホ！　な、支部長、それやったら、どっかにおますやろう」
「そうかも解らんなア、場所はどこがええと思う？」
「ま、ゼイタクを言うんやったら、京都方面がよろしなア。なんせ、木登りから帰りしなに祇園などへ寄る都合もおますさかいに……」
「家族連れでか!?」
「まア、そうでない時かてあるわいサ」
「なるほど、京都ねエ」
「とりあえず、聞いて見てみイ」
無理を覚悟のうえで、支部長は京都周辺の地主を一応調べた。すると不思議なことに、北山の方でもっとも広い土地を所有しながら、山林業にも、観光業にも携わっていない人が一人いた。
どういうことかと思って支部長は、その美しい山と隣り合った土地で製材業をやっている会社へ、情報を集めに行った。話に応じてくれた相手はいかにも呆れた様子で、
「アイツのことか」と顔をしかめた。
「おタクはどんな用事があるか知りませんけど、あの土地とあの木に関係することなら、先ず、アキラめた方がいいですわ。なにしろ、こっちは何年も前から、部分的にでも木材の切り出しをさしてくれと頼んでるけど、オッサンはガンとして聞かんのです」
「ホウ、ご年輩のお方でっか？」
「いや、年はまだ四十をちょっと過ぎたところだが、とにかく、金はいらんという偏屈な人でな

ア」
「ふん、お金持で」
「ええ、連れ込み屋とか、アベック喫茶やら、おかしなお茶屋でメチャクチャに儲かってるわけだ。そのせいか、逆に昔のええしの旦那みたいに上品振って、『京都の貴い伝統をワシが守るのどすえ』とド鳴りまくっているわけだ」
「ま、京都には伝統にアコガレてはるお方は多いことやし、別におかしいことも……」
「しかし、あのアホーめだけは特別だよ。アコガレてるというより、伝統にシガミ付いてるって感じ。何かの大先生になりたくて、長年お茶やら、狂言やらああいうのを必死にやってるけど、商売が商売なもので、ある地点まで進むと、家元の命令でストップが掛かって、先生の肩書を与える流派は一つもない。頭のいい人なら下品な商売をやめて、あの山の材木で食って行けばいいのに……」
「けどなア、京都ちゅうとこは半世紀でもたたなんだらその商売のことなんか忘れてくれしまへんさかいな」
「ま、そうだね。とにかくそんな事情があるから、やむを得ず、他の分野で、伝統をカタターク守ろうとしてるわけだ。あのワズラワしい、古い言葉使いはその一つだし、あの木を切らしてくれないのも、なぜかそういうことだそうですわ」
「ヘエ？　あの木も古い伝統とつながりがおまんのか!?」
「あのジジの頭の中では、どうもそうらしいんだ」
「さようかア、ホウ」

「なに？」
「シメタ！」
「エッ？　そんな気狂いめいた話を聞いて、シメタッて？」
「ヘエ、わたしもキチガイでんねん。おおきに、ありがとさん」
ウキウキと大阪支部長は近くの喫茶店の電話を借りて、早速東京へ連絡した。会長に事情を話して、もう一つの新しい支部を作る了解を得てから、偏屈な地主の京都の家に向かった。口説き作戦はもうすでに頭の中に出来上っていた。
相手の家に着くなり、先ず、自己紹介や用件を言わないうちに、サスガに京都の古き、美しきデントウを感じさせる玄関や！　と深く感心してみせた。上へあげてもらってからも、さらにお座敷、お庭、お茶菓子、相手のお召し物など、何もかもを誉めちぎり、そういう〝違いのわかる男〟を探しに探してた、と叫びたてた。
それから態度を少しあらため、感激したわけの説明に入った。ちょっとした伝統あるグループがあって、東京、大阪と同様、ぜひ京都にも支部を設けたいと考えている。そのために、京都の始祖になってくれる大人物がどうしても必要やが、なかなか見付からん。偶然にも、貴男様が古い物を愛し、しっかり守ってはるお方で、しかも京都の伝統がニジミ出るような立派な木がボカボカ立ってる山林の持ち主やと聞いた時には、胸がドキドキ、嬉し涙がポロポロ、体が震え上がってしもた。こんな大家にはメッタに巡り合えんから、もしもセンセーが、支部長にならん！と断りはったら、うちの会長に対して申しわけが立たんし、腹を切ってお詫びするほかしようがおまへんのだす。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com